

小田原史談

第 6 号

発行所 小田原史談会
小田原市幸一丁目
郷土文化館内

年頭所感

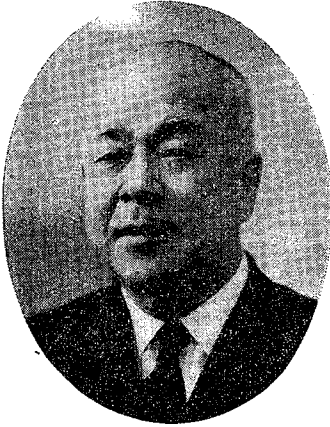
小田原史談会々長 鈴木十郎

新年の御祝詞を申し上げます。

小田原史談会が結成されてから本年度で七度目の新春を迎えたのでありますが、この長い間、本会が郷土の歴史、地理、産業、文化等あらゆる面にわたる調査研究をなし、また各地区に支部を結成して有形無形の文

化財の発掘保存につとめ、さらに各種の展示会、展覧会を開催し、あるいは会報を発行して市民の郷土に対する認識を深める等幾多の業績を残して参りました。これは、郷土感に燃える会員各位の一致協力によるものと深く感謝する次第であります。

新年の御祝詞を申し上げます。小田原史談会が結成されてから本年度で七度目の新春を迎えたのでありますが、この長い間、本会が郷土の歴史、地理、産業、文化等あらゆる面にわたる調査研究をなし、また各地区に支部を結成して有形無形の文



今や本市は古き歴史と伝統の上に、近代都市としての体制を整え、異西

明治の実話

史談会副会長 落合 信一
市会議員

先ず明治三十年代の話、
國府の唐沢海岸の高台に伊達侯の別荘があった。其のすぐ下隣に住む酒飲みみの老人があった。常に上の別荘に出入りして居ると、酔うと大きなことを言うので、世人は通称、仙台伊之さんと呼んで居た。其の仙台伊之じいさんにも特徴があった。酔っぱらいで声が大きく然も即席の唄や句の製作が名人であった。伊之さんの唄に「上の仙台は鶴亀の舞ひ遊び、下の仙台は飲むに足りない」之は常に高声でやって居た言葉のよな唄である。此の仙台伊之さんから、天下の名歌が出た。それは、幕末に最後まで幕府に付いて函館の五稜郭の戦に敗れた大鳥圭介が明治二十年頃から國府津に住んだ。
森戸川の河口に相模湾を一望にして登降富士や箱根連山を四季に眺め足柄平野をへだてて、箱庭のようだと喜んで公事以外は國府津に住んで居た。此の大鳥圭介が清戦争の大話の談判に帝國金権として活躍したことは衆知の通りであり世人が「大鳥を小鳥と見たか伊達章」と唄ったとの話、其の時、仙台伊之さんが下句を直に呼んだ。「未だ日本には鶴(私)が居る」。これが満天下に広がり世人に愛されて唄となった。明治三十五年に大津浪があつて大鳥別荘は一しゅんに流されてしまった。其の後岡の高台に立派な邸宅が再建された。名瀑鳴沢滝を庭にして当時の建築の粋を集めた。其の美麗は「大鳥城」とまで呼ばれ平民は易々中に入れた。晩年も國府津を愛した大鳥圭介は國府津で静かに永眠した。大鳥とは特別の關係にあつた。十五年代將軍(徳川氏最後の將軍)、徳川慶喜が「大鳥は良い場所に陣取つた」と岡の大鳥別荘をこよなく愛され大鳥圭介没後もよく國府津に来て居られた。或る日、慶喜公が大久保の居た小田原に行つて見たい」との話で時の國府津村長(剣持重石)門(筆者の祖母の兄)の案内で人力車で小田原のお堀りに下りた。通常和服に袴をつけた姿で二人して歩いて居ると顔見知りの郡書記に出合ひ「劍持さん今日はどちらへ」と聞かれ、劍持村長は「徳川様の御案内で」「徳川様とは」「前の十五代將軍慶喜公です」と答える、と、びっくりして立去り、しばらくして町役場前から車で帰ろうとすると、K郡長もW警察署長も、其他十数人が挨拶(最敬礼に近い)すべく集つて居たとの話。官尊民卑のはなはだしかった時代である。最後にもう一つ。天下の將軍様ではあつたが、一方やわらかい面もあつた。慶喜公が劍持村長に「私が東京に帰つたら一度本宅に遊びに来てくれ」と数度か言はれたので劍持村長が東京の徳川本邸に訪問した時の話。門番が二人居たので「國府津から重石門が来た」と御前様に取りついでいただき「度い」と申したところ見ると田舎くさい身なりで天下の慶喜公に面会とはおかし

二面へ続く

小田原謡曲連合会

副会長 井上 英一
市会議員

今年の初夢

永ごう年経る龜山の
下は泉の深ければ
吾むす岩谷に松老いて
梢に鶴こそ遊ぶなれと
いづこからともなく奇麗な
音楽と共に声が流れて来
る。

ハテ？此処は何処だろうと
あたりを見廻そうとしたト
タン 眼がさめた、そこは
なつかしい我が家のベッ
ットだ。

元旦そうそうの初夢目度
くもある。
隣室には船橋へ嫁いでいる
娘夫婦、それから成城から
は長男と孫の由利子が離れ
の部屋、又横浜ゴムに勤め
ている次男夫妻は中の間に
陣取っていてそれ／＼の夢
を見ていた事であろう。

後新年を祝う意味で謡曲を
うなる事となった。
先づ最初は「鶴亀」の段庭
の砂は金銀の……
次に「高砂」の 四海波静
かにて……

その次は「羽衣」の 東遊

の数々に……の名調子

それから「狸々」の よも
つきじ万代までの竹の葉の
酒……益々好調
最後に「翁」で目度く千
秋楽となりました。
処で「翁」については少々
書いて見たいと思う。

能楽は昔から非常に神聖視
され舞台の上には普段でも
婦女子は上ることを禁ぜら
れていた様です。従って翁
は能を司る神の如く超然と
しているのであります。で
すから翁をつとめるシテと
もなれば七日前から別火潔
斎して不浄をさけたもので
今でこそ時勢の変化と共に
こうした習慣は自然と薄く
なって来ましたが要す
るに崇高厳肅なる神聖清浄
の能に間違ひありません扱
て「翁」の最初の出の文句
「トウトウタラリタラリ
タラリアカラリタリトウチ
リヤタラリタラリタラリ
アカリタラリトウ」の意味
がお判りでしょうか？

この文章は不思議にも西蔵
国の古代語で祝言のダラニ

これを日本語に訳してみま
すと
得物は 輝き 輝き
「トウトウタラリタラリ
タラリアカラリタラリ
に寿あれや寿命は 長く
リトウ ツエリンヤツ
善く 輝き 輝いて輝は
タラリタラリタラリタラ
あゝいづれも様方に寿あ
リア ガレララ
れや
トウ」

新春を迎えて

飯泉 浅見 靈風

皆様に御意見あれば御教
へ願います
めぐらしく今年の元旦は雨
となって仕舞いましたが何
と云っても近來にない程平
和と有意義の一日を当年八
十九才の老母と共に一族郎
党が新春を寿祝させて頂い
た事を感謝併せて皆様の御多
幸をお祈りいたしました。新
年の御挨拶といたします。

昨春三月、創刊号が出て
から我が会報誌も二年目の
春を迎え喜びにたえません
その間編集部の不馴れから
休刊六ヶ月の空白を余儀な
くされ、役員主脳部の更迭
もあり些か悲観状態もあっ
たが、内容一新して九月か
ら続刊された事は前途に光
明を見出し、会員として会
報の将来に期待する事甚だ
大きい。

創刊号に寄せて会誌への
希望を寄稿しておいたが、
其後の紙面は殆んど特定執
筆者によって埋められ、然
も余りに綺麗ごとで終始し

判るし、神社研究に当れば
先祖の古代民族の移住史が
明らかになれる。又洋装万
能時代を迎え、僅かに葬婚
儀式にのみ残され様とする
各戸の定紋章を蒐集すれば
部落の氏の系統も解明され
様し、眼を広く開らければ
稿材は幾らでもあるであろ
うから、文の巧拙に拘泥せ
ず一人一年一種の意気込み
で各会員の寄稿を期待して
止みません。

私は少なくとも我等の手で
足柄平野の歴史の解明に努
力したいと思えます。土木
工事があったら山野田畑を
問はずその地層を研究して
貰いたい。井戸一つ掘って
もその地層は何万年以前か
らの地史を語って呉れます
尙編集部に希望したい事
は、史談会員は常に新陳代
謝するという事を忘れない
で、既に発表された事柄は
思いを新たに誌上についで
再発表して頂きたいこと
です。小田原市域に関するあ
らゆる史談、そして会員全
部が知りたいと思われる小
田原史は細大洩らさず再掲
稿されたいことです。本史
談会と市社会教育課と市観
光課が研究済みの事件は山

いと思つて中々取付がなか
ったが重右エ門がねばるの
で、ひつじに話して御前様
の耳に入れたところ大喜嫌
で、草履のまま本邸から数
丁ある門前まで自らお向え
になり門番の驚くのを尻に
手を取らんばかりにお邸に
案内され、其夜は宿泊翌日
は慶喜様御案内により東京
見物、邸に二泊して重右エ
門は帰宅した。ずい分肩が
こつたと我々は聞かれたが
重右エ門の実話の自慢話で
ある。又慶喜公の数少い書
をいただき今日は劍持家の
家宝になつて居る。
星霜変り十五年、時代の流
れは人の思想も種々と変化
して行く、仙台伊之さんや
大鳥さん徳川さんが現代の
世想を見られたらどう感じ
られるでしょう。
(筆者の父は明治十五年生
れで数え八十一才で健在で
す、生粋の國府津っ子だけ
に良く知つて居ます。父に
聞かされた話と自分で聞い
た話を綜合して書きまし
た。一昨年史談会主催の明
治の小田原在任名士遺作展
に徳川公や大鳥男の書を出
品致しました。)

ほど有ると思ひます。
 新春を迎えるに当り、先
 ず新投稿者の新人開拓に一
 新紀元を画すと共に、既発
 表市史の再審稿面にも努力

史談会に望む

藁田長平

史談会の意義及びその範圍
 史談会という事については人
 によって見解が異りましょ
 うが、私はこれを広義に解
 して横に、縦に、深く、広
 く掘り上げていったならば
 文化方面は勿論社会のあら
 ゆる方面につながりをもた
 ないものはないと思ひます
 同時に太古の昔から今日ま
 での事蹟が史談の対照とな
 るのはいうまでもありませ
 んが、更に現在の時々刻々
 の日本人の歩みも史談とし
 て将来に残るべきものであ
 ることをわれ／＼は考えね
 ばなりません。従つてその
 影響の及ぼすところ多大な
 るに鑑みて、史談会員はそ
 の発表するところのものも
 質を期し軽卒であつては
 ならぬと思ひます。往々に
 して何等の根拠のない史蹟
 を専美として発表されるの

を見ることあります。伝
 説は伝説として又意見は意
 見として明らかにせねば將
 來に誤りを伝えることにな
 らぬかを私は恐れます。
 小田原人は兎角熱し易く
 醒めやすいと云われていま
 す。これは小田原人に限ら
 ず日本人の通有性でありま
 しょうが、史談会の機関誌
 も難産に難産を重ねて第一
 号が発刊されたとき、後続
 性があるかを危んだのでし
 たが、当局の方々の熱意に
 よつて既に第五号を重ね、
 将来の見通しのついたのは
 喜ぶべきで当局のご努力を
 多として感謝にたえません
 なお、私は一步を進めて將
 來に残すべく、小田原を中
 心として春秋二回(或は一
 回)広い意味の史談に關す
 る読者の研究や意見の発表
 等を網羅せる汎汎なる単行

道祖神とどんどん焼

内田武雄

本を編集する時機の到來を
 切実してやみません。所感
 いたします。

皆様明けましておめでと
 うございます。
 今世界各国におこなわれて
 いる性器崇拜はどこでも穀
 物や家畜がたくさん子を生
 みますようにという、農牧
 の土台から発展したようであ
 ります。インドシナでは
 どこの村へ行つても村の入
 口の道ばたに大きな石棒が
 立てゝある。農民は毎日こ
 の石棒に油をそなえるから
 龜頭にあたる棒の先きがつ
 る／＼光っている。これは
 どこでも稲作のまじない
 であるようだ。ところがま
 た一方性器は悪魔を追いは
 らうという信仰から村の道
 ばたや辻に石棒を立てゝあ
 る。これはあきらかに日本
 の道祖神の祖形である。祖
 先の祖の字の衣冠をとると
 男子の性器だけが残る。こ
 れが石棒であるようだ。こ
 の地方でも下會我、谷津に
 かくれ道祖神というのがあ
 る。大木の根方のうつろの
 中に石棒が二基祀つてあつ

たが心ないだれかに一基持
 ち去られて今は一基しか
 ない。又秦野市の今泉にも二
 基あつて、土地の人はこれ
 をリマワラッセの神様と
 呼んでゐるそうである。
 これは中々立派なもので戦
 前村の駐在のお巡りさん
 がこんなものを道端に立て
 置いては若い者の風紀上
 よくないという理由から、
 まわりにかこいを作つて見
 えないようにしたところ、
 そのお巡りさんは男の大
 事なものではあがつてし
 まい、ついに免職になつた
 とか聞いている。

この地方にも色々な形の道
 祖神があるがだいたい双立
 が一番多く中には、えぼし
 した／＼れ姿で手にはしゃく
 を持っているものもある。
 鴨の宮の加毛神社脇の道祖
 神は珍らしく一人立ちであ
 る。又飯泉觀音の前の道祖
 神は男女二人で向つて左が
 女神、右が男神で手をつな
 いでいるうえに女神は右手

に盃、男神は左手に徳利を
 持っている珍らしい形であ
 る。これをおなじ形のもの
 が桑原の煙草屋の前の道端
 に立っているが、これは男
 神が盃を持ち、女神が徳利
 を持っている。上郡福沢村
 竹松に二基と岡本村矢作芝
 に一基類似のものがあるそ
 うだ。何れにしても道祖神
 は性器崇拜と共に民族の氏
 神として祀られたようであ
 る。私の部落にも五基の道
 祖神が氏別に祀つてある。
 道祖神と共にこの地方では
 今でもサイト焼(どん／＼
 焼)が盛んに行なわれてい
 るが、どん／＼焼の起りは
 天照大神が天の岩屋におか
 くれになった時天鈿女命が
 岩屋の前で火をどん／＼燃
 やしてストリップをやつた
 のが始まりのようで、一年
 中のすべてをきれいなさば
 り焼き捨て、新しい年を迎
 える十二月廿五日頃行なわ
 れたようである。キリスト
 の誕生日とも結び付いてい
 るようであるが、永い間のな
 らわしにより、今では十二
 月のすゝはき頃になるとも
 集まるようになってしまつ
 たが、行事は一月十四日の
 夕方しめ飾り其の他もろも
 ろの物と共にどん／＼燃や
 して一年の農作多穫を祝う
 ようである。

新年漫筆

外郎の虎と早雲寺の虎

中野敬次郎

江戸時代の狂歌に
 ○三絃のトウチン香のその
 音は
 千里に聞ゆ中虎屋外郎
 というのがあるが、これは
 小田原の外郎家の名音が、
 同家の専売する監製透頂香
 の名と共に天下に知られて
 いることを歌つたもので、
 虎屋という屋号であつたの
 をもつたものである。日
 本には虎は住んでいないの
 に上古から日本人が虎を知
 っているのは、昔は朝鮮に
 南鮮地方にまで多数住んで
 いて、日韓交通によつて往
 來する兩國の商人や使者が
 、生捕りにしたものでや皮を

輸入して喧伝したから、百獣の王としてその勇猛を想像し、巨虎一度吼えてその声千里に達するなど言われたもので、記録では最も古く日本書記に話が記され、万葉集にも虎を詠んだものが数種あらわれてくる。そこで屋号にも虎屋とつけるの家名響き商運繁昌すると言われておった。そうばかりには限るまいけれども、小田原の外郎家などは虎屋と名乗って正に凶星が当たった家柄だろう。

小田原の外郎家の祖先は我が国の鎌倉時代に、中国の元朝の順帝に仕え、官位が礼部員外郎になった陳延祐という人であった。この人元朝滅びて明朝が興きたるとき、二君に仕えることを潔よしとしないで日本の九州博多に帰化したのが、帰化後参禅羅髪して宗教と号したので、陳宗敬と名乗り、また旧官位が礼部員外郎であったので、姓名を聞く人あれば必ず陳外郎と答えたので、子孫は家の姓を外郎家と称することになった。二代大年のときから京都に住み、医薬業を以て足利將軍家に仕えたが、五代外郎藤右衛門尉定治のとき、大永元年(一五二二)北条氏綱の招きに応じて小田原城下に移住して、こゝに小田原外郎家が興きたのである。家名が有名になったのは祖先が製法を中国から伝来した透頂番を専売したが、これが靈薬として東海道を下する旅人に愛用せられたからであるが、特に同家の名が江戸市民や天下の人々にあまねく知られるようになったのは、享保三年(一七一八)に二代目田川團十郎が江戸の森田座で「若緑勢會我」を上演したときに団十郎らが外郎売りの姿に扮して舞台に立って「外郎売りせりふ」を早口で述べたが、以後これが有名になって団十郎も名声を馳せたと、代々市川家の家の芸となって、歌舞伎十八番の中にも入り、また「早口せりふ」の流行さえもたらして一般民衆が競うて外郎せりふを習い、覚えしたので、歌舞伎と早言を通じて、外郎家の名と名乗る「ういろう」透頂番が知られるようになったのである。

「拙者親方と申すはず立合の中にも御存じの方もござりませうが、お江戸を立って二十里上方相州小田原一色町をおすぎなされて青物町を登りへおいてなされは綱十橋虎屋藤右衛門只今は別髪いたして内弁となり

壬寅元旦 清水專吉郎
かゝやきの 日の出むかえて
天守閣 箱根足柄 山すその海

壬寅新年 養田天峰

鳥兔匆匆 独自憐
人生如梦 又新月
未灰八十三 投老
賀客樽前 笑瓦全
うつらなる心のひまの石路匂ふ
霜の光け塵もとどめす人踏まず

身めぐりに夜目のたのしき梅祭り
ひかり満ち雲のたゞよう 広沢十五夜

編集だより
本号は年頭のため連載ものは次号より掲載いたします。

第6号
昭和三十七年一月十五日発行
(毎月一回発行)

「拙者親方と申すはず立合の中にも御存じの方もござりませうが、お江戸を立って二十里上方相州小田原一色町をおすぎなされて青物町を登りへおいてなされは綱十橋虎屋藤右衛門只今は別髪いたして内弁となり

謹賀新年

大雄山線 運営事務所	駅前 あさひ 電話二六八〇番
小田原報徳 自動車株式会社 太陽自動車株式会社 明るい生活 楽しい読書 八小堂 電話五三八八〇九	箱根登山鉄道 株式会社
株式会社 小田原百貨店 社長 神戸英次郎	箱根登山テパパート 電話小田原五一〇一
松坂屋製菓本舗 小田原市十字二 電話五二七六番	集栄堂本店 電話二二七六番
きそば寿庵 小田原駅前 電話二八六一番	化粧品は錦通り 松屋 電話三三三六番
小田原信用金庫	オダワラ薬局 電話三〇四八番
あなたの洋品店 はふふや 電話二二〇七番	御料理 御弁当 仕出し 東華軒 電話五〇六一二番
写真用品なんでも揃う カメラの光輝堂 電話五九六五番	趣味の陶器 江島屋 箱根口 電話六六〇二番
寝具の店 花田屋 電話三七七八番	写真は イガラシ 電話二五三四番
甘露梅 月の衣 正栄堂菓子舗 電話五三三二番	平野商会 電話二四四九番
高級陶器の店 江島屋陶舗 電話五四二七番	